熊本学園大学
社会福祉学部

子ども家庭福祉学科 10周年記念

～ひとり親家庭支援事業を振り返って～

kofuku10years

子どもと家庭のウェルビーイングを願う
子ども家庭福祉学科のシンボル

“ こふくろう ”

子ども家庭福祉学科十周年記念

―ひとり親家庭支援事業の 10 年を振り返って―

刊行に際して

熊本学園大学　学長

幸田　亮一

子ども家庭福祉学科 10 周年の記念を祝して記念誌が刊行されることに心よりお慶び申し上げます。

子ども家庭福祉学科が設置された翌年 2007 年 4 月から熊本市との連携で「ひとり親家庭支援事業」が始まりました。この間の経緯や成果は本文で詳述されるのでここでは省き、代わりに熊本市と本学の関係に言及しておきます。

社会福祉学部第一部子ども家庭福祉学科は 2006 年 4 月に設置されましたが、その出発は半世紀前の 1957 年の熊本短期大学社会科保育科課程に遡ることができます。

この熊本短期大学および熊本商科大学の初代学長が、第 8 代熊本市長を務められた高橋守雄先生であることはみなさんよくご存知のとおりです。さらに第 12 代ならびに第 19、20 代の市長を務められた石坂繁先生は熊本学園理事長として長らく本学の発展に尽力されました。

このような歴史的経緯もあり、熊本市役所のなかで多くの本学出身者が活躍中であり、この他にもスタートアップ企業の育成を目指して「肥後創成塾」も熊本市と一緒に行ってきています。

末筆になりましたが、子ども家庭福祉学科のいっそうの発展と、このような支援事業の新たな展開を願ってお祝いの挨拶とします。

社会福祉学部長

山崎　史郎

熊本学園大学社会福祉学部子ども家庭福祉学科の 10 周年にあたり、一言ご挨拶申し上げます。前身である熊本短期大学保育科は昭和 36 年に創設されました。経済成長率が年平均 10％を超え、ベビーブーム以降、益々多くの子どもたちが幼児教育・保育を受けるようになってきた時期のことです。以来、「熊短保育科」と呼び慣わされ、熊本での幼児教育・保育界に確固たる地位を築いてきました。その後、熊本学園大学社会福祉学部社会福祉学科、さらに子ども家庭福祉学科と歩みを進め、社会福祉に根ざした幼児教育・保育を深めるということで県内に比べるもののない地位を確立しています。「熊短保育・学園大子福」のマインドを体現して活躍してきて頂いたすべての卒業生の皆様、幼稚園・保育園・児童施設はじめ関係機関、諸団体の皆様、評価していただいている地域の皆様に心から感謝いたします。

子ども家庭福祉学科は今後さらに、乳児保育の充実、保育所・認定こども園の幼児教育機能強化に対応していくなど、時代・社会と共に歩み続けます。次の 10 年でさらなる飛躍を見せてくれるでしょう。皆様には是非、その発展を見守り続け一層の応援をいただくようお願いして、挨拶の言葉といたします。

子ども家庭福祉学科長

吉津　晶子

子ども家庭福祉学科の10周年にあたり，ご挨拶申し上げます。

熊本学園大学第一部社会福祉学部に子ども家庭福祉学科が設置されてから 10 年の節目を迎えることができました。これもひとえに子ども家庭福祉学科を支えてくださいます幼稚園・保育園・児童施設はじめ関係機関，諸団体の皆様のおかげと感謝いたしております。

さて，子ども家庭福祉学科では，従来の子どもだけに視点を置いた保育・幼児教育ではなく，子どもの幸福と親・家族の幸福をともに実現することを目指した保育者養成を行なっております。子どもと子育て家庭に優しい社会づくりのために，その理論と実践を学ぶことのできるカリキュラムが設置当初からの特徴となっております。また，カリキュラムに用意されたフィールドワーク実習や熊本市との提携による「熊本市ひとり親家庭児童訪問援助事業」など，学外での学びなどを組入れたアクティブ・ラーニングを進めて参りました。

これら複合的な学びの構築を通して，地域に貢献できる保育者を送り出していくという社会からの要請・期待に応えられるよう，より一層の努力を続けていきたいと考えております。

皆様方には，更なる子ども家庭福祉学科へのご指導，ご鞭撻をいただけますようお願い申し上げ，挨拶のことばとさせていただきます。

ひとり親家庭児童訪問援助事業の 10 年を振り返って

伊藤　良高（子ども家庭福祉学科　教授）

ひとり親家庭児童訪問援助事業という言葉を聞いて、多くの人たちは何を思いうかべ、どのようなイメージを描くのでしょうか。本学、とくに社会福祉学部子ども家庭福祉学科といえば、そのオリジナルな活動として、１つは 2008 年秋から開催している学生主体のイベントの「げんきっずフェスティバル」、そして、もう１つは、2007 年春から実施され、今でも全国的に稀有な地域貢献活動としての「ひとり親家庭児童訪問援助事業」が挙げられますが、当事者をはじめ社会一般的にみれば、熊本市及び本学の関係者による粉骨砕身級の尽力にもかかわらず、意外と知られていない／こなかったといえるのかもしれません。

しかしながら、それでも、10 年間に及ぶ学生の自主性に支えられてきたこの事業の持つ意義やレガシ―は、今後も様々なかたちで施策や実践に活かされ、生きてくるものであると、事業の直接的担当者の一人として確信しています。近年における子どもと家庭を取り巻く環境の変化のなかで、子どもと家庭の幸福（ウェルビーイング）の実現に向けて、当事者のニーズに即した子ども・子育て支援が求められていますが、ここ数年、子どもの貧困対策とのかかわりで、大きなうねりとなっている子ども食堂や子どもの学習支援などの動きにとどまらず、子ども家庭福祉の取り組みがさらに充実、発展していくことを願ってやみません。かたちを変えたひとり親家庭児童訪問援助事業の発展、深化が望まれます。

子ども家庭福祉学科 10 周年記念事業内容について

出川　聖尚子（子ども家庭福祉学科　准教授）

熊本学園大学社会福祉学部子ども家庭福祉学科設立 10 周年を記念して、「子ども家庭福祉学科 10 周年記念事業～ひとり親支援事業を振り返って～」と題して３つの事業を開催しました。

卒業生リカレント教育　対象：卒業生・在学生

子ども家庭福祉学科の多くの卒業生が、保育に関係する仕事に着き熊本県内で仕事をしています。こうした卒業生がさらに保育現場で活躍していくことを応援をしたいと思い、卒業生の学び直しの機会を持つこととしました。今回は、保育の現場での課題となっている３つのテーマを取り上げ実施しました。

《講座１》
日時：2017年11月20日（月）18時30分～20時00分
会場：14号館1階1412教室
講義テーマ：
「家庭の SOS 気づいていますか？児童虐待へのまなざし」
講師：松本 幸枝 氏（ソーシャルワーカー）

《講座２》
日時：2017 年 11 月 28 日（火）18 時 30 分～ 20 時 00 分
会場：14 号館 1 階 1412 教室
講義テーマ：「それって障がい？子どもたちとともにつくる豊かな保育」
講師：尾道 幸子 氏（心理士・相談支援専門員）

《講座３》
日時：2017 年 12 月 5 日（火）18 時 30 分～ 20 時 00 分
会場：14 号館 1 階 1412 教室
講義テーマ：「保育者に求められるコミュニケーション力」
講師：赤星 香世子 氏（ソーシャルワーカー・本学元教授）

参加した卒業生からは、働いているからこ、学ぶことの大切さや学ぶ時間を持てることのありがたさを感じているという話や、「勉強になった」、「久しぶりに大学に来て気持ちが新たになった」、「また実施してほしい」などの声が聞かれ、実施した意義を感じました。

ホームカミングデー　対象：卒業生・教職員

日時：2017 年 12 月 10 日（日）13 時 00 分～ 15 時 00 分

会場：12 号館　ベーカリー

卒業生からの報告：認定こども園保育教諭・保育所保育士・児童養護施設保育士 / ソーシャルワーカー交流会

これまで子ども家庭福祉学科を卒業した 1 期生から 8 期生までの卒業生たちを大学に迎え、ホームカミングデー（同窓会）を実施しました。学科の卒業生と学科教員とが大学で久しぶりに交流しました。

ホームカミングデーは茶話会形式で、幼稚園、保育所、児童福祉施設で活躍する卒業生からの報告も行われました。報告では、それぞれに迷いながらも自分なりに仕事に向き合っている姿がありました。意見交換では、経験を積んだ卒業生から就職したばかりの卒業生へのアドバイスもあり、それぞれに成長した姿を感じました。

学科教員からも近況報告では、ワイワイガヤガヤ、爆笑・・・、みな学生に見えました。2 時間という予定の時間はあっという間に過ぎ、それぞれ笑顔で戻っていきました。教員も卒業生の元気な姿をみて安心し、活力をもらうことができました。

記念講演・シンポジウム

対象：卒業生・在学生・教職員・一般の方

日時：2018 年 1 月 21 日（日）15 時 00 分～ 17 時 30 分

会場：14 号館 1 階高橋守雄記念ホール

■記念講演　15時00分～16時00分

記念講演タイトル：

「子どもの貧困」と地域支援の課題

―「見えない貧困」への理解を通して

講演者：法政大学教授　湯浅 誠 氏

■シンポジウム16時10分～17時30分

シンポジウムタイトル：

「子ども家庭福祉学科 10 周年記念

― ひとり親家庭支援事業を振り返って」

パネリスト：伊藤良高 社会福祉学部教授、

池田賀一　氏（熊本市子ども支援課　課長）、

平野愛美　氏（訪問援助経験者本学卒業生）、

竹原 美佐子 氏（熊本市母子・父子福祉センター元館長）

コメンテーター：法政大学教授　湯浅 誠 氏、

司会：山西　裕美　社会福祉学部准教授

子ども家庭福祉学科 10 周年記念事業 ―記念講演・シンポジウム

山西　裕美（子ども家庭福祉学科　准教授）

2018 年 1 月 21 日 (日)15:00-17:00
場所：熊本学園大学　高橋守雄記念ホール

記念講演
「子どもの貧困」と地域支援の課題
―「見えない貧困」への理解を通して
法政大学教授　湯浅　誠氏

シンポジウム
「子ども家庭福祉学科 10 周年記念―ひとり親家庭支援事業を振り返って」
パネリスト：熊本学園大学社会福祉学部子ども家庭福祉学科教授　伊藤良高氏
熊本市子ども支援課　課長　池田賀一氏
訪問助員経験元学生　子ども家庭福学科 7 期生　平野愛実氏
熊本市母子・父子福祉センター元館長　竹原美佐子氏
コメンテーター：法政大学教授　湯浅　誠氏
司　会：熊本学園大学会福祉学部子ども家庭福祉学科准教授　山西裕美

子ども家庭福祉学科十周年記念事業として、前半の記念講演では貧困問題に取り組まれる法政大学教授湯浅誠氏に子どもの貧困問題についてお話いただきました。後半のシンポジウムでは、子ども家庭福祉学科が熊本市と一緒に平成 19 年度から 28 年度まで 10 年間取り組んできた「ひとり親家庭児童等訪問援助事業」を振り返り、熊本市や訪問援助活動経験者など各シンポジストの報告が行われました。各シンポジストの報告内容は二部で紹介しますので、以下に当日の湯浅誠氏の記念講演とシンポジウムでのコメント内容の概要を紹介します。

「貧困」と「貧乏」は違います。貧困には 3 つの喪失が伴います。お金が無い、自信がない、社会性の損失、つまり、つながりがありません。貧乏は、一番目のお金が無いだけでお金が無くても周囲で色々と助けてくれる人もいて幸せということがあるけれど、貧困は違います。貧困とは、お金だけでなく、頼れる人間関係も無く、精神的に余裕がなくて自信も失い、自分の尊厳も守れない状況です。友達がいないことと、自分に自信が無いことは、子どもに対して周囲からの疎外感をもたらし自ら孤立させます。

でも、ボランティアのお兄さんやお姉さんのような存在は、貧困家庭の子どもにとっても、きょうだいとは違った“ 斜めの関係 ” となり、色々な人の存在を知るきっかけ、つまり多様性や価値観など社会性を育むことになります。“doing”(働きかけること) だけではなく、“being”(そばにいること) にも意味があります。行政は赤信号への対応としたら、地域社会は黄信号での段階で止められます。人との関わり、つまり会話を通じて語彙力が上がることが子どもの学力を向上させるという結果が、海外での調査からも明らかになりました。残念ながら、この学生によるひとり親家庭児童の訪問援助事業は昨年度で終わったそうですが、仕事と家事で忙しい親の代わりに、訪問援助員のお姉さんやお兄さんと接して一緒に遊んだり勉強したりすることを通じて、誰かとの関りを持てることは子どもの発達にもとても良いことだと思います。

離婚やひとり親家庭は特別な人のことではありません。日本のひとり親は世界一働いていても貧困な状況を知っていただき、是非、このような環境にある子どもたちへの御理解と、地域社会のひとりとして支えることを考えていただきたいと思います。

講演とシンポジウムに参加した学生たちから寄せられた声を紹介します。

○ 全国の高校生の声の紹介から、友だちがいたらお金がいるから一人でいる、進学したくても働かざるをえない、買い物するのも進学も金額を見て諦めるなど、自分がしたい道に進めない、こうしたいと思っても現実には出来ないということが、正直自分とはかけ離れた環境の違い、価値観の違いを知りました。

○ 貧困は誰のせいでもないのに、親も子どもも自分を責め、我慢して過ごし毎日が苦しい、死にたいなど、自分より年下の子どもが思っていると思うと凄く悲しい

し、貧困が無くなることをひたすら祈ります。

○ 貧困とは、お金が無いことに限らず、つながりや自信が無いということを理解したうえで、私たちがすべきことはつながりを作り、困っている子どもたちが堂々と生活できる世の中を作っていくことだと感じました。また、特別なことをしなくても、その子どもにとっては特別ということもあり、そばにいるだけで支援できることを学びました。

○ 今回の湯浅先生の講演を伺って、現在の貧困などについて理解がより深まったし、深刻さについても知ることができました。貧しいという理由で様々な日常生活における楽しみができなくなったり、頑張りたいのに頑張れなかったりする子どもたちが、まだまだたくさんいることが分かりました。

○ 全国で私と年齢が変わらない人たちが、こんなにも生活する中で日々苦しみと闘っているのだと驚かされました。貧困から、友だち関係や家族、将来のことなど壊されていて、希望も失っているので、大きな問題だと思いました。

○ シンポジウムでは、実際に体験したお話や熊本市母子父子福祉センターの方のお話を聞いて、ひとり親家庭のイメージがとても変わりました。実際に行ってみて感じることが大切だと思いました。

○ 高校生のリアルな声をまとめたスライドを見て、お金が無いから進学したいけどできないなどといった話は授業でも聞いていました。しかし、お金が無くて友達と仲良くできないし、お金がかかるから学校では一人でいるなどといった声があって、人とのつながりさえもなくなってしまうと思いました。みんな平等な世の中を作っていくことが、難しいけど大切なことだと思いました。

○ お金、つながり、自信は関連し合っており、お金が無いとつながりがなくなりやすくなる、つながりが無いと自信がなくなりやすくなると思いました。このような負の連鎖を阻止するには、子どもたちが黄信号を出していることに気づくことだと思いました。

○ “鍋をつつく”という私たちにとって当たり前のことでも、そうで無い人たちがいると伺い、一緒にいること、つながりがあることも支援になるのだと学びました。

○ 特に印象に残ったのは、「いるだけ支援」という言葉です。支援者が何も特別なことはしなくても、その子どもにとっては良い経験になったり、特別な思い出が出来るわけであり、支援者はそこにいるだけでも支援となりえるということに驚きました。子どもにとっては支援者が自然体であることに、様々な驚きや発見をできるものだ、それも一つの支援ということに気づき、その意義についてよく理解しておかなければならないと思いました。

○ この事業に携わった方の体験談を聞いて子どもの良い影響を与えていることを知りました。子どもが学生と関わりを持つことで子ども自身が色々な体験を通して成長していけるのだと感じた。

○ ひとり親家庭児童訪問援助事業は継続して行うことに意味があるのではないかと思います。この事業は実習やボランティと同様、多くのことを学べる機会だと感じます。学園大学が先頭になってこの事業を進めていくことで地域との繋がりが深まることに留まらず、学生の学びも助長されると思います。

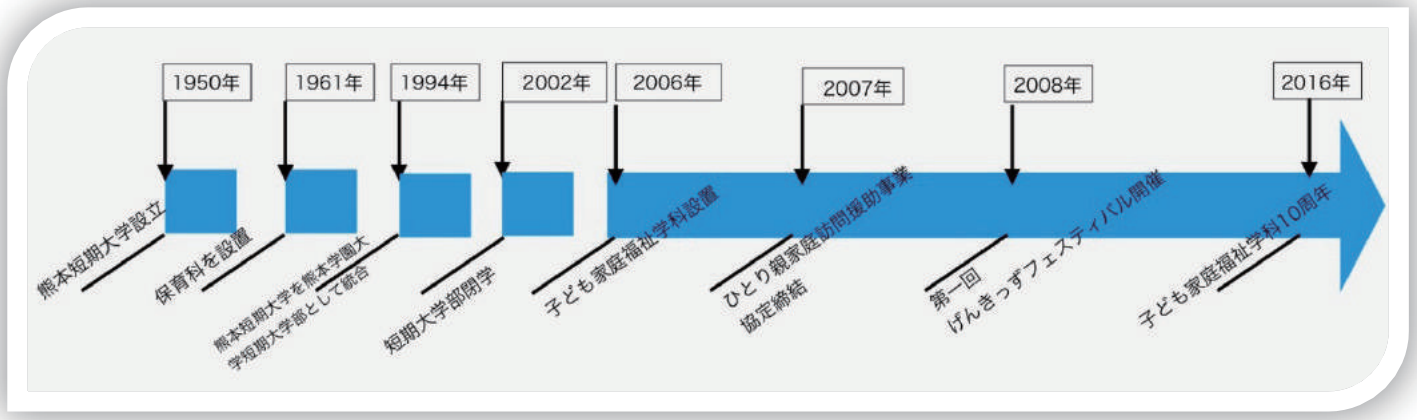
○ 湯浅先生のお兄さんが難病を患っていらっしゃり、当時良い思いをすることがあまりなかったのも事実だけど、ボランティアの人たちに教えてもらうことが多かったのも事実だったと、ボランティアの学生との関りが糧になることもあると知ることができ学びました。

○ 貧困は親も苦しいけど、子どもも親を思いながら我慢をしたり気をつかったり、精神的な部分にも影響があること知りました。周囲からの支援や環境づくりということが欠かせなくなっていると思います。

第一章　子ども家庭福祉学科十年のあゆみ

1．学科紹介
1）子ども家庭福祉学科沿革

吉津　晶子（子ども家庭福祉学科長）



2006 年 4 月，熊本学園大学第一部社会福祉学部に子ども家庭福祉学科は設置されました。熊本短期大学から続く保育者養成という歴史の上に，新たな歴史の一歩がスタートしました。

2007 年には熊本市との連携協力事業として「ひとり親家庭支援事業」の協定締結が行われ，大学での学びを地域社会へと還元する学生たちの姿が見られるようになりました。

2008 年 11 月には学生主催の事業として第一回「げんきっずフェスティバル」が開かれ，これまでに十回の開催を重ねています。げんきっずフェスティバルには，近隣の保育園・幼稚園，子育て家庭をお招きし，大学の地域貢献の 1 つとして認知されるようになってきました。

2016 年には子ども家庭福祉学科は 10 周年を迎え，年度末である 2017 年 3 月末までに総卒業生数は 695 名となりました。

沿革

2006 年 4 月	社会福祉学部第一部子ども家庭福祉学科設置
2008 年 11 月	第一回げんきっずフェスティバル開催
2007 年 4 月	熊本市と「ひとり親家庭訪問援助事業」の連携協力に関する協定締結
2009 年 11 月	第二回げんきっずフェスティバル開催
2010 年 3 月	子ども家庭福祉学科一期生卒業
2010 年 11 月	第三回げんきっずフェスティバル開催
2011 年 3 月	子ども家庭福祉学科二期生卒業
2011 年 11 月	第四回げんきっずフェスティバル開催
2012 年 3 月	子ども家庭福祉学科三期生卒業
2012 年 11 月	第五回げんきっずフェスティバル開催
2013 年 3 月	子ども家庭福祉学科四期生卒業
2013 年 11 月	第六回げんきっずフェスティバル開催
2014 年 3 月	子ども家庭福祉学科五期生卒業
2014 年 11 月	第七回げんきっずフェスティバル開催
2015 年 3 月	子ども家庭福祉学科六期生卒業
2015 年 11 月	第八回げんきっずフェスティバル開催
2016 年 3 月	子ども家庭福祉学科七期生卒業
2016 年 11 月	第九回げんきっずフェスティバル開催
2017 年 3 月	子ども家庭福祉学科八期生卒業
2017 年 11 月	第十回げんきっずフェスティバル開催

子ども家庭福祉学科開設オープンカレッジ（'06/9/30）

子ども家庭福祉学科完成記念レセプション（'09/10/28）

1．学科紹介
2）子ども家庭福祉学科の教育の特長

伊東　浩一（子ども家庭福祉学科　教授）

〇子育てと福祉

社会福祉の視点から子育てを考えていくことが、本学科の特徴です。保育や幼児教育だけでなく、家庭・地域支援などについても学び、子どものケア、保護者への対応、地域とのつながりなど、子育てに関する領域で幅広い対応力を習得します。

〇現場力

幼稚園や保育園での教育実習をはじめ、ひとり親家庭への訪問活動や子ども向けのイベント企画など、現場を経験できる機会を数多く設けています。こうした活動を通して、コミュニケーション能力や協調性、現場対応力などのスキルを身につけます。

〇公務員に高い就職率

これまで保育所、幼稚園、児童福祉施設などに多くの保育者を送り出しています。近年は市町村の公務員保育士を受験する学生も増えており、大学における多様な学びをいかして多くの合格者を出しています。

（以上、本学子ども家庭福祉学科の HP より、２０１８年２月５日）

〇げんきっずフェスティバル

このほかにも、毎年秋に「げんきっずフェスティバル」を本学１４号館で開催し、地域の子育て家庭や幼稚園・保育所の方たちを招いて開催しています。内容はミュージカル・人形劇・迷路ゲーム・親子体操・ペープサートなど盛りだくさんで、今年はテーマ「はばたけみらいへ」のもと、ミュージカル「桃太郎」や親子体操「エビカニクス」人形劇「おだんごぱん」などを熱演していました。

美術教育の現場から　　田中　均（子ども家庭福祉学科　教授）

美術教室のある７号館は、熊本地震の２年前に耐震補強の工事を終えていて、大きな被害は受けずにすみました。子ども家庭福祉学科は、カリキュラムを整え学科としてスタートして１０年を経ました。　造形Ⅱや保育内容研究（感性と表現）の実技科目では、「きもち」を表現するという事をテーマにして作品の制作を行っています。色や形の組み合わせにより様々な「きもち」を表現する事ができます。　表現とは自身の「内にあるもの」を誰かに伝えたくて外に出す行為だと思います。既成の概念に捕らわれない自由な表現を楽しむ。　身近にある材料や、保育現場で使っている材料を用いて作品の制作をしています。アイデアが出てきたら「やってみよう」「やってみなきゃ分からない」「失敗したらもう一度」。やり直す事も楽しい事です。　２年生の中頃に最初の実習に出ます。生きている子どもたちと接して、教室に戻ってくる学生に変化があらわれてきます。子ども達と心の通った関わりの難しさを肌で感じるようです。　保育者自身が豊かな感性を持ち、表現する楽しさを子ども達に伝えられる、そのような保育者を目指してように制作に励んでいます。

音楽教育の現場から　　大津山　姿子（子ども家庭福祉学科　特任講師）

大学生活にも慣れ始めた２年生の春学期から、保育現場において重要な役割を占めるピアノ実技の授業は始まります。音楽の基礎的な能力を養うために、授業前の事前アンケート調査をもとに、習熟度別に三クラスを編成して、集団授業を行います。

１コマの授業内において全ての学生が個人指導を受けられ、また並行して練習が出来るように、ML 教室が 2008 年に導入されました。このことにより、学生は集中して練習に取り組めるようになりました。

集団での授業におけるメリット・デメリットはありますが、同じ目標をもって励む者同士、他の人の演奏を聴く事により自らを反省し向上させるという相互研鑽のメリットが大きいと考えられます。また、繰り返し練習する事によって出来なかった事が出来るようになるという達成感を味わいながら、更なる音楽活動への高みへと学生自らが歩を進めております。

２年次の基礎的なピアノから始まり、弾き歌い、色々な伴奏法・声楽・表現活動などを卒業までの間に学生達は学んでいきます。現場で必要とされる人材の育成を目指し、あらゆる（弾けるだけ・歌えるだけではなく）方面からの学びを構築しています。

3）子ども家庭福祉学科の実習教育
実習 ―実践と理論の結合

宮里　六郎（子ども家庭福祉学科　教授）

実習―実践と理論の結合

本学科は保育士、幼稚園教員、社会福祉士の３つの養成課程が有り、それぞれ保育実習、幼稚園実習、ソーシャルワーク実習を表のように実施しています。

学生は実習で実際子どもや保育者にふれることで、子どもが好きになり保育への夢を膨らませます。実習は学生生活最大のハイライトです。

本学科では、実習を次のように位置づけています。第一に、保育について理解を深めるには、理論的に学習するだけでなく、経験を通して学ぶ必要があります。実習は、実際の保育の場で子どもと保育について実践的に学ぶ場となります。第二に、実習は、学習課題の発見の場であると同時に、理論的に学んだことを実践的に確かめる場です。第三に、実習は、保育への意欲と関心を高め、保育者としての意志と適性を確認する場です。

実習は、講義と一体となって進められます。２年次の春学期より、各学期に１つは実習が行われるように配置されており、講義で学んだことを実習で確かめ、実習で感じた課題を講義で確かめていきます。子どもたちの顔を思い浮かべながら講義を生き生きと聞いています。

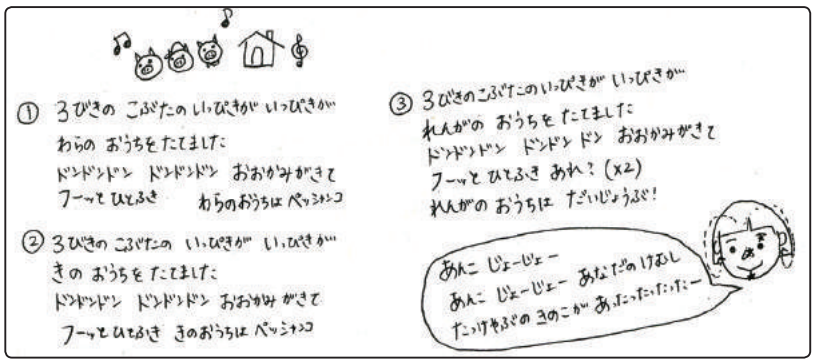
また実習は観察実習、参加実習、担任実習という段階を踏んで深められていきます。２年次の保育実習１Ａ、教育実習Ⅰでは観察、参加、部分実習が中心となりますが、３年次の保育実習Ⅱ、４年次の教育実習では、クラス担任としての基礎的な力量を身につけるために一日実習を中心に深めます。また本学科の特徴として子ども家庭福実習があります。免許資格実習がすべて終わった４年次後期、さらに実習課題を深めるために、あるいは進路選択のために、自分の希望する幼稚園・保育所・施設等で実習できます。職場の視点から就職先を選択しています。

本学科学生は、実習記録が理論的によく考察されていると高く評価されています。今後も実践と理論を兼ね備えた保育センスのある学生を養成していきたいと思います。

子ども家庭福祉学科　実習時期と種別

	２年春	２年秋	３年春	３年秋	４年春	４年秋
保育実習	保育実習ⅠＡ（保育所、２W）、９月		保育実習ⅠＢ（施設、２W）１期９月※	※保育ⅠＢ２期２月 保育実習Ⅱ（保育所）又は保育実習Ⅲ（施設）２W３月		子ども家庭福祉実習（選択２W）１０月
幼稚園実習		教育実習Ⅰ（２W）２月			教育実習Ⅱ（２W）６月	
ソーシャルワーク実習			ソーシャルワークⅠⅡ（４w）８～９月			

「さくらんぼ保育園」世良明子先生資料より



子ども家庭福祉学科とソーシャルワーカー

岡村　ゆかり（子ども家庭福祉学科　特任助教）

子ども家庭福祉学科の社会福祉士養成課程修了者は、これまでに 100 名程にのぼります。資格としては、社会福祉士だけではなく、保育士か幼稚園教諭のどちらかとのダブル資格 (あるいはトリプル) を目指す学生がほとんどです。そのため、ソーシャルワークを学ぶなかにおいても子どもへの関心が強く、子どもの視点、子どもの環境などに目を向けることが得意な学生が多いと感じています。

近年、ソーシャルワーク分野においては、スクールソーシャルワーク、ファミリーソーシャルワーク、保育ソーシャルワークといった言葉が多くみられるようになりました。これらが物語ることは、子どもへの関心の高まりと言えると思います。特に子どもに係わる問題や置かれている環境の複雑さ多様さといったものが、単に「家庭の問題」「その子の問題」といったことでは解決しない、「社会の問題」として捉えられるようになったということでもあります。子どもにかかわるソーシャルワークを取り上げてみて、本学科におけるソーシャルワーカー養成の強みというものに今一度目を向ける機会となりました。

卒業生（保育士・幼稚園教諭）による実習指導（下 2 枚）

4)10年目を迎えた“げんきっずフェスティバル”
～運営スタッフへのエール～

続　修二（子ども家庭福祉学科　特任准教授）

第10回・げんききっずフェスティバルも無事に終了し、運営に当たった委員の学生達もホッとしていることと思います。

毎年のことながら、各学年の実行委員決めからスタートします。これが、一番の難関かもしれません。その後、それぞれの担当を決め、実際の作業が始まります。

しかし、なかなか全員が集まることが出来ず、また運営スタッフの学年も違うので、人間関係を構築するのに時間がかかり、思うように作業が進まず、夜遅くまで残っての作業など大変なことも多く、苦労している姿を見てきました。

そんな状況の中でも、子ども達の目線に立ち、子ども達が怪我をしないような素材選び、おもちゃの作成、安全性を考慮したゲームなど何度も話し合いを重ね、試行錯誤を繰り返し成長していく姿もまた見てきました。

イベント当日も、遊びに来た子ども達との触れ合いや、保護者への対応など、将来保育者を目指している学生にとって貴重な経験になっていると思います。特に、一年生にとって上級生の子ども達に対する接し方など、とても参考になっているのではないかと思います。

苦労したり大変な思いをした分、やり遂げた時の得られる充実感は大きいものです。

実際、げんききっずのことを懐かしく学生時代のいい思い出になっていると話す卒業生も多くいます。

ステージ発表を観ながら、手探りで始め、間に合うだろうか、ちゃんと形になるのだろうかと不安げな顔を見せていた学生達が、当日ステージやそれぞれのブースで見せる充実した顔に変わっていく姿を見るのは毎年の楽しみになっています。

運営に携わった縁の下の力持ちの学生達に、心からご苦労様・お疲れ様、いい顔していたよ！と伝えたい。

げんきっずフェスティバル

げんきっずフェスティバル

4) 就職状況

栗原　武志（子ども家庭福祉学科　准教授）

出生率は緩やかな増減を繰り返し減少の一方をたどるものの、ここ数年第２次ベビーブーム世代が親世代になり園に入れたくても入れない待機児童の問題がクローズアップされています。「保育所落ちた、日本死ね！」で国会での論争が起き、日本中が沸いたのは記憶に新しいところでしょう。これがきっかけとなり保育士不足といったキーワードにも光が当てられたのではないでしょうか。有資格者は潜在的にたくさんいるけれど、なり手が少ない、いない、といった人材不足が言われています。全産業の平均からいくと、保育者としての給与が 10 万程低いといった待遇の問題や、小さなお子さんを預かるという責任の問題、また、保護者との信頼関係構築といった問題など、保育にまつわる問題はキリがありません。現在、保育士の九州各県の有効求人倍率は次のとおりです。

（H29.3 時点 熊本 2.03　福岡 1.96 佐賀 1.69 長崎 1.81 大分 1.41 宮崎 2.48 鹿児島 1.93 沖縄 2.98）。東京に関しては、瞬間的に求人倍率 20 倍の風が吹いたとも揶揄される事があるように、全国的に完全な売り手市場が展開されています。本学の学生も時流に乗り、また、諸先輩方の現場における地道な努力の甲斐あって、平成 28 年度の求人件数は表１のとおりでした。また、ここ５年程は表２のとおり右肩あがりで求人をいただいております。最新の平成 28 年度の就職状況は表３のとおりです。

表１　求人状況：平成 28 年度求人件数

	県内	県外		
		九州	九州外	計
幼稚園　99件	40 (49)	44 (39)	15 (16)	59 (55)
保育所　300件	143 (116)	82 (69)	75 (57)	157 (126)
児童施設　34件	15 (15)	13 (10)	6 (5)	19 (15)
医療関係　3件	1 (1)	1 (1)	1 ()	2 (1)
計　436件(378件)	199 (181)	140 (119)	97 (78)	237 (197)

（　）は平成27年度の数字

ここ数年は、公立園の保育士の正規職いわば公務員としての保育職に合格する学生が入学者定員の１割強に至るのが、本学科の大きな特色であり、高校生向け募集戦略での大きな強みになっております。

キャリアアップ研修や教員免許更新講習といった現職保育者の研修の機会も増え、国をあげた待遇改善への制度も見え始めました。本学科卒業の学生は「何事にも一生懸命で」「真面目」「将来の幹部候補生」「気配りができる」と外部からの評価も高く、また、そのとおりの活躍をしてくれています。諸先輩方に続く有為な学生の輩出に、学科教員一同引き続き努めて参りたいと考えております。

表２　求人件数一覧

	平成29年度（12月末現在）			平成28年度			平成27年度			平成26年度			平成25年度		
		県内	県外		県内	県外		県内	県外		県内	県外		県内	県外
幼稚園	128	49	79	99	40	59	104	49	55	80	34	46	80	33	47
保育園	317	149	168	300	143	157	242	116	126	207	102	105	196	109	87
児童施設	11	7	4	34	15	19	30	15	15	24	10	14	28	15	13
医療関係	5	1	4	3	1	2	2	1	1	2	2	0	3	1	2
合　計	461	206	255	436	199	237	378	181	197	313	148	165	307	158	149

備考：幼稚園・保育園には認定子ども園を含む

表３　平成 28 年度進路内訳

	人数	割合（%）
保育所・保育士	34 (39)	44.2% (48.)
幼稚園	17 (10)	22.1% (12.)
医療・福祉	8 (6)	10.4% (7.4)
公務員（保育士等）	10 (9)	13.0% (11.1)
企業等	6 (14)	7.8% (17.3)
進学	1	1.3%
その他（就職希望せず）	1 (3)	1.3% (3.7)
合計	77 (81)	

（　）は平成27年度の数字

ホームカミングデー〔H30.1.21〕：卒業生からの報告
幼稚園教諭：恵水幼稚園　丸田 華江氏　〔写真中央〕
保育園保育士：宮丸こども園　蔵満 さゆり氏　〔写真左〕
児童養護施設保育士 &SW：藤崎台童園　西井 裕美子氏
〔写真右〕

2. 子ども家庭福祉学科　卒業生の声から

坂田　美咲さん
第二幼稚園：８期生
2016年度卒

熊本学園大学子ども家庭福祉学科を卒業して、早１年が経ちました。大学生活では、各年齢に応じた発達段階や虐待についてなど、保育や福祉に関することを数多く学んできました。実際に幼稚園教諭として働き始めてからは、ひとつひとつの行事や出来事が初めてで、戸惑ったり、他の先生方の足を引っ張っているのではないかと悩んだりすることもたくさんありました。でも、先輩方も悩みながら進んで来られたのだと知り、私も頑張らなければと､何度も励まされました。この１年間、子どもと一緒に自分自身も成長することができた１年間だったと感じています。運動会や音楽会、生活発表会などの大きな行事までの取り組みはとても大変で、しんどいな、きついな、と弱音を吐きたくなることもたくさんありました。でも、それらを無事に終えたときの達成感は言葉では表すことができません。大学の講義だけでは知ることができなかったことだと思います。また、子どもたちが自己肯定感を高く持ち、何事にも挑戦できる子どもに育つために、子どもたちの素敵な部分をたくさん見つけ、それを認めることを心がけて過ごしています。まだまだ未熟な私ですが、先輩の先生方の背中を追いかけつつ、自分の意志もしっかりと持ち、さらに大きく成長していきたいと思います。

田中　佳織さん
さくらんぼ保育園：１期生
2009年度卒

熊本学園大学社会福祉学部子ども家庭福祉学科10周年おめでとうございます。声をかけていただいたのでお祝いの気持ちを込めて、近況と学科の頃の思い出を少しお話しさせていただこうと思います。

私は子ども家庭福祉学科一期生の田中佳織と申します。昔から子どもが大好きで、保育士になるのが夢だったので、子ども家庭福祉学科で保育を学べる毎日がとても楽しく、特に宮里六郎先生の授業は、胸を打たれるものでした。宮里先生の語る保育観にみるみる引き込まれていき、感動した私は、初めての講義後、宮里先生の研究室を突然訪問したほどです。

二年生の時の初めての実習で実習させていただいた保育園が、まさに私の運命の保育園でした。「なんて素敵な園なのだろう！こんな最高な園、他にない！」と胸がいっぱいになったことを今でも覚えています。子どもも大人も心からイキイキのびのび笑っていて、自然と共存しているようなありのままの笑顔があり、その保育園にある全てのものが幸せであふれているような、そんな印象でした。四年生まで心変わりすることなく、ラブレターのような履歴書を書いてその園に持って行きました。運良く、卒業してからすぐその園で働くことが決まり、気づけばもうすぐ９年目。今では２歳になる娘とともに母子通園をさせていただいています。子ども家庭福祉学科で保育を学んでいなければ、今の充実した幸せな生活はありません。大学四年間で出会った保育観、友人たち、恩師、たくさんの思い出。今でも大学四年間は私の宝物です。

國生　佳那さん
済生会病院：８期生
2016年度卒

現在私は、病院で医療ソーシャルワーカーとして、主に患者様の転退院支援業務を行っています。当院は急性期の病院ということもあり、経済面や心理面において様々な不安を抱えている患者様も多く、そういった患者様一人一人の気持ちに寄り添った支援をしたいと考え仕事をしています。入院ベッドの回転が早く、一人一人と関わることのできる時間は短いですが、そのような状況の中で少しでも患者様の想いを汲み取り、信頼関係を築くことが出来るよう日々努力をしています。

私は、４年間の大学生活の中で、子どもから高齢者まで幅広く福祉について学びました。元々子どもが好きで、小さい頃から保育士になることが夢でしたが、子ども家庭福祉学科に所属して、社会福祉士という職業を知り興味を持ちました。保育士と社会福祉士の両方の資格を取るためには、同じ学科の友達より授業数も多く、大変だと感じる時もありました。しかし現在、社会福祉士としての仕事にやりがいを感じており、このコースに進んで本当に良かったと思っています。子ども家庭福祉学科で学び私が一番感じた事は、どちらの仕事も人と関わる仕事であり責任が伴うため、しっかりと知識を身につけておく事が大切だということです。現在は、その知識を活かし経験を積んでいきたいと感じています。

西井　裕美子さん
藤崎台童園：３期生
2011年度卒

子ども家庭福祉学科を卒業し、早くも六年経ちました。在学中には、子どもに関する知識として様々な分野からの知識を学び、また同じ志を持つ友とも出会い、一緒に現在の保育・これからの保育についても語り合いお互いを高め合えていたと思います。先生方にも勉学はもちろん、子どもに対する姿勢や、実際に働くに当たっての心構えや情報等も沢山いただき、社会に出てからの礎を築くことができました。

藤崎台童園に勤め、児童養護の道に進みましたが、保育に合わせて支援の面がとても多く、戸惑いや不安でいつも先輩方にアドバイスをいただきながら走り回ってきました。子ども達の持つ課題はすぐに改善できるものでもなく、現状を受け止め長い目を持ち今後その子が社会に出てからも自立して生活ができるようにとまで見据えての支援が必要な時もあります。その為の知識・経験、そして子ども達に寄り添う姿勢がとても大事だと実感しています。児童養護は今まだ発展途上の状態で職員のスキルアップの必要性・制度や態勢の見直しも頻繁にあります。子どもの幸せのために何ができるのか、子どもにとっての人生に大きく関わるという責任のある仕事なので、そのことを胸にこれからも日々邁進していきたいと思います。

3. 支えて下さっている地域の方々の声から

伊藤　大介氏
熊本市私立幼稚園・認定こども園協会会長
第二幼稚園　園長

学校法人熊本学園 熊本学園大学 子ども家庭福祉学科が、10 周年という記念すべき年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

「子育てと家庭のあり方を福祉の視点から学ぶ」ことを目的として、2006 年に開設され、「教育理論に基づいた実践的指導力に富む専門職業人である幼稚園教員を養成する教育」を行うことを目標に日々取り組んでおられ、その熱意と努力に対して、心から敬意を表します。

また、貴学科を巣立った 695 名を超える卒業生が、現在、様々な分野で活躍されていると伺い、誠に喜ばしいことと存じます。

これからも、その教員養成目標のもと、関係法令、指針等を踏まえた特色ある教員養成を続けられることと確信しております。

ところで、教育・保育要領にも謳われている通り、「乳幼児期の教育及び保育は、子どもの健全な心身の発達を図りつつ生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの」です。ICT 化が進み、AI 技術等の進歩が著しい昨今、乳幼児期に大きく成長する非認知的能力が世界中でこれまでにない程注目され、その乳幼児の教育・保育に携わる教員の重要性は益々高まっています。昨年、公教育の担い手として質の保証と向上のため、教員養成コアカリキュラムが策定されたことからも分かるとおり、養成・採用・研修と、段階を追った明確なキャリアシステムの構築により、これまで以上に関係各所が接続し、高度な専門家としてのキャリアアップの体制が整備されて行かなければならないと考えております。子どもたちのため、養成校、各園、行政、そして、本協会が、連携・協力し、更なる養成・研修の充実が図られることを願っております。

最後になりましたが、開設 10 周年を機に、益々貴学科が発展され、その卒業生がご活躍されることをご祈念申し上げて、お祝いの言葉といたします。

建川　美徳氏
さくらんぼ保育園　園長

熊本学園大学社会福祉学部子ども家庭福祉学科 10 周年おめでとうございます。

私事ですが、妻は熊短卒業で長女と三女は社会福祉学部卒業ということで、非常に親近感を持っています。毎年子ども家庭福祉学科の学生が実習にも来てくれ、実習記録を見ても子どもを見る視点やとらえ方など、良く観察していることがわかり本学科の先生方の指導の賜物だと思います。また、本実習だけでなく、自主実習にも来てくれ、それが就職に繋がって、この保育士不足の中、非常に助かっています。現在、学園大卒業生が 9 名働いており、さくらんぼ保育園での中心的役割を担ってくれています。そのうち 7 名は母子通園をしており、子育てしながら保育現場で頑張ってくれていることに、感謝しています。

さくらんぼ保育園は認可外から 11 年前に認可になり、4 年前から見せるための行事はやめて、ゆったりした空間の中で大人に見守られながら、年齢幅のある子ども同士があそびを通じて、日々成長していってほしいという思いから、1 ～ 5 歳児の異年齢保育を行っています。

保育現場は処遇の悪さや職場の人間関係が原因で保育士になる人が少なく、大変な状況ですが、これからも本学科との良い関係を保ちつつ、働き続けられる楽しい職場づくりを追求していきたいと思います。

最後になりましたが、熊本学園大学社会福祉学部子ども家庭福祉学科の益々のご発展を祈念しまして、お祝いとお礼のことばとさせていただきます。

葛山　ゆり氏
済生会熊本病院　患者相談支援室

高齢化が進む中、疾病構造の重症化とともに、患者さんを取り巻く社会背景も複雑化しています。

当院は「医療を通じて地域社会に貢献する」を理念に、職員一同励んでいます。

国が進めている地域包括ケアを構築するためには、医療の機能分化、地域全体での役割分担が求められており、住み慣れた地域で暮らしていける社会作りが必要です。

私たちの部署は、医療連携部の 1 室である患者相談支援室に組織化され、地域との連携・協同を行っており、重要な部署（病院の要）として位置づけられています。

國生さんは、同部署に所属し、入院中の患者さんの転退院支援や相談業務を中心に携わっていただいています。

済生会熊本病院の一員として、MSW の役割発揮が出来るよう、大学で学ばれた知識をあらゆる場面で活用し、患者視点に立ち、寄り添いかつ、コミュニケーション能力を発揮しながら日々の患者相談や支援業務がおこなわれています。迷われ、葛藤を抱かれる場面も多くあるかと思いますが、先輩の MSW に相談しながら、患者さんのためにと思い対応され、元気な姿で自宅へ退院となる患者さんも多くあります。その様なとき患者さんから感謝の言葉を聞く場面も多くあります。

子供福祉学科の皆さんは、大学で多くのことを学ばれていると思います。

学ばれたことは、将来、医療機関、福祉の現場、保育の現場などあらゆる場所で役に立つ、誇りが持てるものです。頑張ってください。

北村　直登さん
児童養護施設　藤崎台童園　園長

子ども家庭福祉科を卒業し、即　児童養護施設に入社して子ども達と拘わりを持ち新しい人生を出発する職員は必ずと言っていいほど悩み、挫折感を味わうのではないでしょうか？

実習で経験し、学業で学んでも解らない、理解出来ないことが実際に日々続くのです。

それは何でしょうか？

日常生活を２４時間営み、子どもと向き合って即お父さんやお母さんをしなければならないのです。経験も無いのに・・・・。子どもの前でどんな父や母であるべきなのか「仕事ではなく、子どもの親として関わり、接していかなければならないから。

貴福祉科の卒業生を多く採用しています。なかなか就職してくれない業種にも関わらず多くの卒業生が来てくれる背景は？新人を中堅がサポートし教育する体制やスーパービジョン・マネジメント等職員間の相互協力や実現的な創意工夫を子ども達と共に心掛けたい。

子どもたちは「心に傷」を持っていやいや施設にやってくる。大変大きな「心の傷」をどのように親でもない若い職員が接し癒していくのか、親のイメージ回復を学生時代の過ごし方や福祉科の先生方の考え方、勉学等でさりげない配慮がこもった日常生活を積み重ねて行ってほしい。

第二章　熊本市ひとり親家庭児童訪問援助事業 10 年のあゆみ

1. 事業開始に当たって

伊藤　良高（子ども家庭福祉学科　教授）

今から12年近くも前のことになりますが、「ひとり親家庭児童訪問」という当時あまり耳慣れない言葉を聞くことになりました。そのきっかけは、2006年の暮れに、熊本市子育て支援課（当時）の職員の方々が、子ども家庭福祉学科長（当時）をしていた私のもとを訪ねてこられ、予算が正式に決定したらという前提ではあるが、2007年度以降、本学の学生が「児童訪問援助員」として、熊本市におけるひとり親家庭（母子家庭･父子家庭）の子どもたち（対象は、小・中学生）を訪問して、話し相手や相談相手、遊び相手となってほしいというご相談を受けたときでした。急速な少子化が進行するなかで、2003年7月に、「少子化社会対策基本法」や「次世代育成支援推進法」が制定され、家庭や子育てに夢を持ち、次代の社会を担う子どもを安心して生み、育てることのできる環境を整備していくことが大切であること、また、国及び地方公共団体は、子どもを生み、育てる者を支援する地域社会の形成のために、地域における子育て支援の拠点整備など様々な子育て支援施策の策定･実施が求められたことなどが、その背景となっていたということができます。

市の方の話によれば、学生が「児童訪問援助員」（愛称は、「ホームフレンド」）として活動するという取り組みは、これまでに例がなく、全国でも初めてということでした。2006年4月、前身となる熊本短期大学保育科を改組転換して、これも、全国初となる「子ども家庭福祉学科」を立ちあげ、初代学科長としてそのスタートにあたり日々奮闘していた私にとって、同事業は、いわば、運命の出会いと感じられるものでした。それまでの保育科をさらにバージョンアップさせて、子どもと家庭の幸福（ウェルビーング）の実現をめざす「子ども家庭福祉」の理論と実践を創造し、その分野における指導的な人材を育成する学科の実力が問われる試金石となるのではないかと考えたことが主な理由でした。すぐさま、私はアクションをおこすことになります。まず、学長（同時）や社会福祉学部長（同）、子ども家庭福祉・社会福祉の先生方及び事務部局に相談して、大学を挙げて取り組むべき事業として位置づけるべく、学長をトップとする全学委員会を創設しました。同委員会は、その名称を「熊本市ひとり親家庭児童訪問援助事業等実施委員会」といい、少なくとも年に2回、熊本市と本学の関係者が一堂に会して事業の進捗状況を点検し、事業を推進していくという役目を担うもので、本学として、日常的な実務については、私が窓口を担当することになりました。

とはいえ、それから先は、まさに試行錯誤といえる状況が続いていきました。とりあえずは、ひとり親家庭児童支援に係る先行研究や実践についての資料収集をはじめ、2007年度からの実施に向けて必要な作業をピックアップしました。すべてが熊本市との連携協力の取り組みですので、研究・教育・学内業務・社会活動の合間を縫いながら、ほぼ毎日にわたって、市の担当者との電話やメールでの頻繁なやり取りを行いました。その作業は思いのほか、多くの時間とエネルギーを要するものとなりました。しかし、そのことが逆に、全国に恥じないしっかりしたものを作り上げていかねばという自身の気合いとなったことも、また事実でした。その後、熊本市と本学は、この事業実施に向けての連携協力に係る協定を取り交わすことになります。同協定は、以降に行われる熊本市と本学との「包括協定」への足がかり、きっかけとなりました。学生も多いに関心を持ってくれ、学内の説明会には、100名を超える多数の参加がありました。全国初となるひとり親家庭児童訪問援助事業の「学生版」は、こうしたかたちでスタートすることになったのです。

2. ひとり親家庭児童訪問援助事業について　　熊本市　子ども支援課

1.事業の取組の背景、経緯

熊本市では、地域の実情に応じたひとり親家庭等に対する施策を総合的かつ計画的に展開するために平成１９年３月「熊本市ひとり親家庭等自立促進計画」を策定した。

本事業は、この計画における子育て支援策の中の重要な一つとして位置づけたもので、計画策定段階から、子ども家庭福祉の課程がある、熊本学園大学と協議を重ね、平成１９年４月、熊本市と熊本学園大学との間で熊本市ひとり親家庭児童訪問援助事業における連携協力に関する協定を締結したもの。平成１９年度から訪問を開始し、平成２８年度末に事業を終了。

2.事業目的

この事業は、母子家庭及び父子家庭の児童に対して、児童訪問援助員を派遣し、親との死別、親の離婚等により精神的に不安定な状態にある“児童の心の葛藤の緩和”や“児童の心の支え”となることを目的としている。

3.事業内容

(1) 派遣対象者

ひとり親家庭及び父母のいない家庭の小学生、中学生（ただし、不登校児童等については熊本市教育委員会の「ユアフレンド事業」で対応）

(2) 児童訪問援助員　熊本学園大学社会福祉学部学生及び大学院生

(3) 事業詳細

①訪問回数、時間：月２回、１回につき４時間以内

②訪問期間　　：原則６ヶ月間

③活動内容　　：相談相手、話し相手、遊び相手、簡単な学習指導など

④活動場所　　：児童の家、公園、学校、図書館等の公的機関

⑤児童訪問援助員の謝礼：１回あたり２，４００円（交通費含む）

⑥フォローアップ研修：

経験者の発表やグループ討議を行い次年度に向けて研修を行う

※派遣実施にあたっては、申請者の親及び児童に対し聞き取りを行い、希望する活動内容と合う児童訪問援助員とマッチングを行い、初回訪問時には市職員も立会いお互いが事業の目的を理解するよう注意事項等を十分に説明し、派遣中は児童訪問援助員からの報告書にて状況把握するよう努めた。

4.事業実績

家庭　　申請者数：215 人　　派遣決定者数：144 人

最終年度待機者数：11 人

学生　　登録者数：687 人　　派遣決定者数：157 人

延べ派遣回数：1,143 回

5.事業の成果等

- ひとり親家庭に対して、対象の子どもの心の安定及び保護者への安心感を与えることができた。
- 研究機関としての大学と連携することで、単なる派遣事業ではなく、大学や学生とひとり親家庭への総合的な支援を共同で考える仕組みとなった。
- 男子学生の派遣を希望されることがあったが、男子学生の登録数が少なく、複数人の女子学生を派遣したこともあった。
- 学生が活動することで、市民協働としての取り組みができた。
- 市政だよりやメールマガジンにて周知を行ったものの、家庭からの申請数、学生の登録数共に減少傾向にあった。

2012 年度熊本学園大学付属社会福祉研究所研究会：
ひとり親家庭における子育て支援の実践と課題
『熊本市ひとり親家庭児童訪問援助事業』の五か年を振り返って　（‘12/10/13）

ＤＯがくもんＸＶI　第２回特別セミナー
テーマ「ひとり親家庭の子育て支援
―大学も子育て応援団―」（‘08/11/15）

3. 事業内容　―利用者調査結果より

山西　裕美（子ども家庭福祉学科　准教授）

2007 年 4 月 16 日に熊本学園大学は熊本市と「熊本市ひとり親家庭児童訪問援助事業」実施における連携協力について協定書を、また、2008 年 8 月には本学は熊本市と包括協定を締結し本事業はこの包括協定の下で、2007（平成 19）年度から開始され 2016（平成 28）年度で 10 年目を迎え終了しました。

グラフは本事業利用者対象に行ったアンケート調査結果（2011 年 12 月実施アンケート調査：配布数 69 世帯、回収数 32 世帯、回収率 46.4% うち利用終了 57 世帯・利用中 12 世帯）からの抜粋です（熊本学園大学付属社会福祉研究所調査研究費　2010 年 -2012 年『シングル・ペアレント・ファミリー支援についての調査研究』研究代表　山西裕美　伊藤良高・出川聖尚子）。回答いただけた方々に対してではありますが、訪問援助員の学生についての評価は、保護者や子ども共に高く、活動内容もやはり子どもの遊び相手が多くなっています。

以下利用された保護者からの声を紹介します。

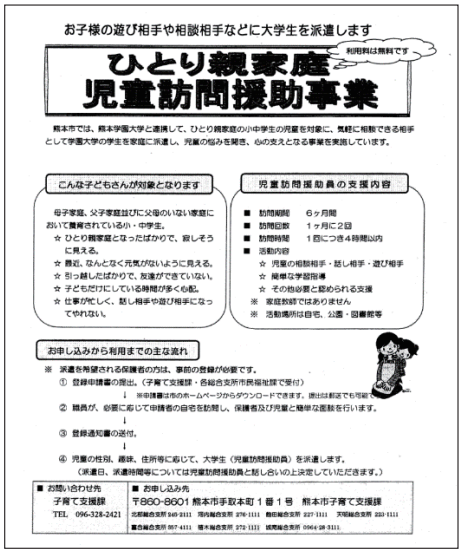
・ひとり親にとって実際に子育て支援事業に参加し、大変感謝しております。派遣の学生がとても明るくお話上手だったので、無口な子どもにとってとても刺激になったようです。… (略)…"母子家庭"というだけで負担ですし、なかなか相談できず月日が経ち、子ども達が成長するケースも多いと思いますが、小さな子どもを抱えた家庭は大変だと思います。そんな時の支援活動はありがたいと思います。

・熊本のひとり親に対する支援事業をもっと多くの人が利用できるといいなと思います。できれば年齢別の支援プログラムがあれば助かります。

・私の家庭の場合、初めての訪問事業を利用させていただき、本当に素晴らしい学生さん 2 人に来ていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。

・長男が利用させていただきました。もうすぐ次男が入学するので、また利用させていただきたいと思っています。男子学生が少ないようですが、男の子の遊び相手として、また男子学生を希望したいと思っています。

・学生さんが、勉強や、楽しい知識を持って子どもに接してくれたので、すごく助かりました。私もひとりで子育てすると、子ども達も親も息切れしてしまいます。他の人の知識力を借りて、育てる意味をこの事業を利用して知りました。たくさんの方が少しの時間を使って、こんなに子どもがイキイキと楽しく過ごせる時間があることを教え、与えて頂けることを心から祈っています。…(略)…今とても充実した時間を過ごしています。ありがとうございました。


お子様の遊び相手や相談相手などに大学生を派遣します

利用料は無料です

ひとり親家庭
児童訪問援助事業

熊本市では、熊本学園大学と連携して、ひとり親家庭の小中学生の児童を対象に、気軽に相談できる相手として学園大学の学生を家庭に派遣し、児童の悩みを聞き、心の支えとなる事業を実施しています。

こんな子どもさんが対象となります

母子家庭、父子家庭並びに父母のいない家庭において養育されている小・中学生。
☆ ひとり親家庭となったばかりで、寂しそうに見える。
☆ 最近、なんとなく元気がないように見える。
☆ 引っ越したばかりで、友達ができていない。
☆ 子どもだけにしている時間が多くも配。
☆ 仕事が忙しく、話し相手や遊び相手になってやれない。

児童訪問援助員の支援内容

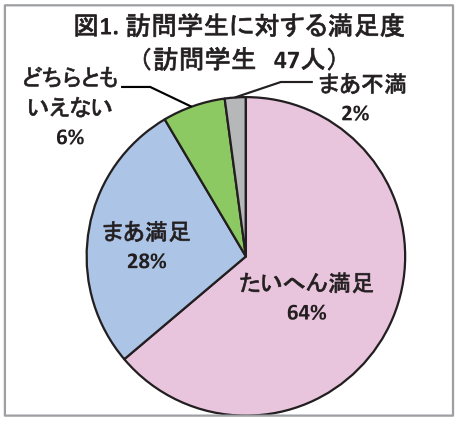
■ 訪問期間　6ヶ月間
■ 訪問回数　1ヶ月に2回
■ 訪問時間　1回につき4時間以内
■ 活動内容
☆ 児童の相談相手・話し相手・遊び相手
☆ 簡単な学習指導
☆ その他必要と認められる支援
※ 家庭教師ではありません
※ 活動場所は自宅、公園・図書館等

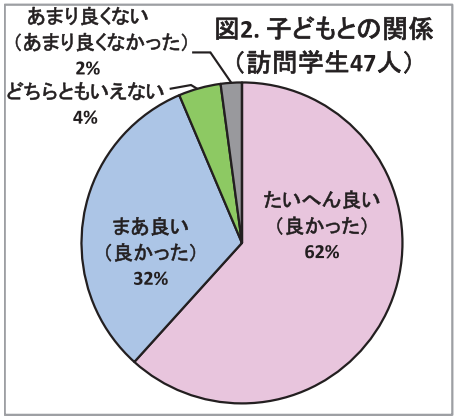
お申し込みから利用までの主な流れ

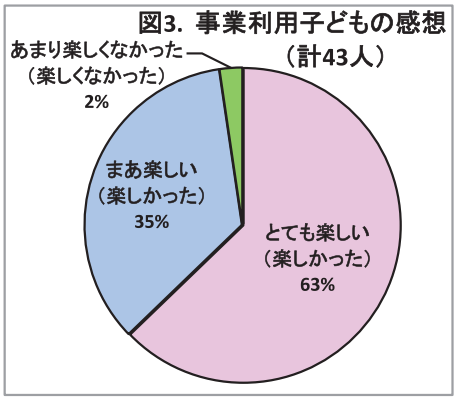
※ 派遣を希望される保護者の方は、事前の登録が必要です。
① 登録申請書の提出。（子育て支援課・各総合支所市民福祉課で受付）
※申請書は市のホームページからダウンロードできます。郵送は郵送でも可能
② 職員が、必要に応じて申請者の自宅を訪問し、保護者及び児童と簡単な面談を行います。
③ 登録通知書の送付。
④ 児童の性別、趣味、住所等に応じて、大学生（児童訪問援助員）を派遣します。
（派遣日、派遣時間等については児童訪問援助員と話し合いの上決定していただきます。）

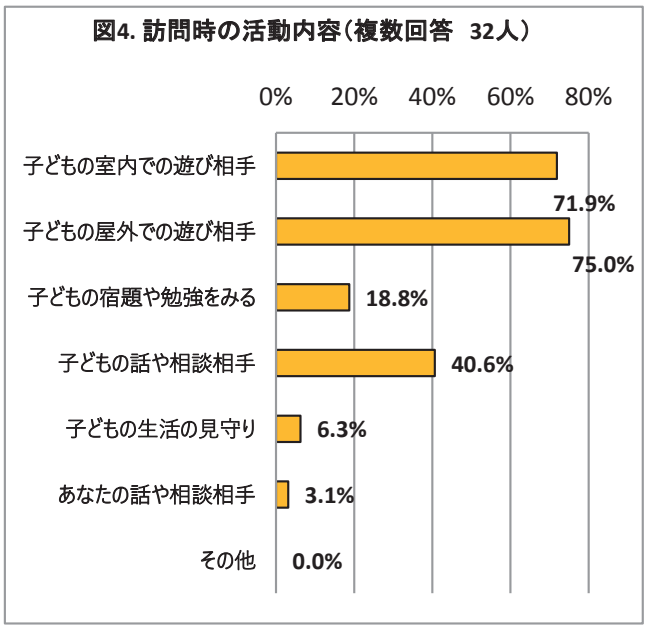
■ お問い合わせ先
子育て支援課
TEL　096-328-2421

■ お申し込み先
〒860-8601 熊本市手取本町１番１号　熊本市子育て支援課









4.「児童ソーシャルワーク特論」担当教員より一言

伊藤　良高
子ども家庭福祉学科　教授

児童ソーシャルワーク特論は、社会福祉学部子ども家庭福祉学科のオリジナルな科目として位置づけられているものです。保育・幼児教育をはじめ、子ども・子育て支援におけるソーシャルワークの理論と実践について考究する科目であり、熊本県内で最初に、４年制保育者養成校として創設された同学科の特色を示すものの１つとなっています。

2007 年度に本学と熊本市との連携協力による「ひとり親家庭児童訪問援助事業」が始まってからは、「児童訪問援助員」に対する研修内容の充実と登録者数の安定的確保をめざすため、この科目を事業とリンクさせながら進めていくことになりました。連続的な教育内容を一定の時間をかけて教授することで、子どもたちに身近な“地域のお姉さん・お兄さん”的な存在（ソーシャル・キャピタル）として、その資質・能力の向上に努めていったのです。

私自身は、「ひとり親家庭の子育て支援をめぐる現状と課題」や「保育ソーシャルワークの理論と実践」について講じてきました。とくに後者にあっては、近年の保育施設及び地域社会における保育ソーシャルワーク実践の必要性に鑑み、大きな意味あいを持つものとして重視されてきました。今後、保育者養成において、その重要性は増していくものと考えられ、この科目を中心に、保育ソーシャルワーク教育のさらなる充実、発展が求められます。

下地　明友
福祉環境学科　教授・神経精神科医

重要だと思うことを箇条書きにする。

1、精神医学的「知」の活用
　ひとり親家庭の生活史と心の歩みに寄り添うために精神科的「知」の活用も重要であることをこの特論は認識していました。

2、学生が訪問し現場に参入することの意味は重要

3、家庭の文化、雰囲気の感知の重大さ
　ある固有の家庭の文化は雰囲気として体感されます。雰囲気に包まれ関係性は培われる、「異文化」体験です。

4、物語
　子どもたちの声を物語のように聞く。親の物語、家の物語がみえてくるでしょう。

5、二等辺三角形の対話
　「対話」の認識も重要です。専門家ではない学生には難しいことだが「対話の二等辺三角形」をイメージするとよい。学生は学生の立場という特異性が持ち味。相手との間に「介在物」をそっと置く。たとえばキャッチボール、お手玉、本、あそびなど。

6、より大きな環境に包まれて学生は家庭と出会う
　学生は大輪に包まれながらゆとりをもち対峙することが肝要。大輪とは大学、市の関係者の見守りでした。

7、秘密、制度の意味
　学生は、支援関係における「秘密」や「制度」の意義を理解するだろう。

8、家族、学生、大学、熊本市は「共有体験」により深く学び、そして未来が開かれる。

出川　聖尚子
子ども家庭福祉学科　准教授

児童ソーシャルワーク特論の私の担当講義では、熊本市にある「こうのとりのゆりかご」を取り上げ、そこから、子どもの育ちの背景にある多様な「家庭」、多様な子どもや子育ての考え方について理解を深めるようにしました。

具体的には、毎年出される「こうのとりのゆりかご」の報告をもとに、預けられた子どもの状況、利用した人たちの年齢や背景、抱えている状況などを理解したうえで、なぜ「こうのとりのゆりかご」を利用することを選択したのかについて考えていきました。

学生たちの多くが子どもが大好きで、子どものことをなによりも優先するのが望ましいという気持ちを持っています。しかし、そう思っていても現実にはなかなかできない状況が社会にはあります。その状況についてすべて共感はできなくても寄り添い理解する力が、現実の家庭と関わるときには必要だと考えています。

この講義と連携していた、「熊本市ひとり親訪問援助事業」では、学生が現実的な子どもや家庭とのかかわりをさせていただくことができる機会でした。経験できた学生にとっては非常に学びが深かったのではないかと思います。

宮里　六郎
子ども家庭福祉学科　教授

保育現場で虐待が疑われる親子がいても通告をためらうことがあります。それは第一に信じることと疑うことの狭間で悩むからです。保育者は親を信頼することが基本ですが、虐待は疑わなければ発見出来ません。家庭は安らぎの場という家族観の例外を認める捉え方が必要になります。第二に通告すると親との関係が崩れるのではないかという不安があるからです。「『通告』は親への懲罰ではなく、親と子の双方を救い、親子の関係を修復するための入り口」(玉井邦夫)だと考えるべきでしょう。第三に児童相談所など虐待防止のネットワークを信じて任せることができないからです。我が子同様に考える担任の責任感から関係機関の対応の遅さに批判的な気持ちが芽生えます。また、関係機関について知識不足やネットワークを組んでの仕事に不慣れなこともあります。ソーシャルワーク的な力量も求められます。

児童相談所は虐待が疑われる場合はすぐに通告して下さいと指導するだけでなく、保育者が我がクラスの子どものことを思う気持ちや保護者を疑いにくい立場にあることを理解した上で、通告を促すことも必要ではないかと思います。

山崎　史郎
社会福祉学部　学部長
子ども家庭福祉学科　教授

「児童ソーシャルワーク特論」担当教員として、授業では「子どもと親への接し方」について指導してきました。子どもと自分自身の安全と安心を守るには、いくらか心得が必要です。学生は素直で善意のかたまりであり、子どもたちと上手につながっていきますが、ちょっとしたことで傷ついたり傷つけてしまったりすることもあり得ます。保育のプロの知識と技術を学びながらボランティアで活動する、そこにはどう振る舞うべきかについての「難しさ」もあったと思います。

それにしても、学生たちの姿には印象づけられました。毎年のまとめの発表会では、普段、受け身の姿勢が目立つ学生たちが授業の何倍も多く話してくれ、感じたことや考えたことがよく伝わりました。学生たちがよく話していたのは、ひとり親家庭の子どもへの先入観が変わったということでした。活動で子どもたちに触れ、自分の思っていたのと違うということを受け入れながら、また成長してくれたと思います。子どもたちと同様、学生にとっても記憶に残る活動になりました。教師としても、終わってみて改めてこの事業の意義を確認することができました。ありがとうございました。

山西　裕美
子ども家庭福祉学科　准教授

この授業で私が担当したのは「ひとり親家庭支援の現状と課題」についてです。春学期 15 回の内の 2 回分を担当していました。OECD 加盟国の中でも先進国であるはずの日本は他国に比べても子どもの相対的貧困率が高く、直近の厚生労働省によるデータ (平成 28 年国民生活基礎調査結果) でも 13.9% と約 7 人に一人の子どもが貧困ですし、景気の好転によって日本全体の貧困率は下がっても、ひとり親家庭の場合はまだ 50.3% と過半数が貧困ライン以下の生活です。授業では、訪問援助員を目指す学生たちに、このように母親が働いても貧困である日本の社会の仕組みと世界との違いなど、福祉国家体制の違いという広い観点から理解をしてもらうことを目指しました。そして、学生たちが訪問援助活動を通じて、子どもたちの気持ちに寄り添い支えることが“貧困の連鎖”を断ち切るきっかけになることを願いながら授業を行いました。毎年度末のフォローアップ研修会で聞く学生の報告では、実に素晴らしい援助活動をしてくれていること知り、私自身も学生の経験から多くを学ばせて貰いました。この授業を通じて素晴らしい事業と学生たちに出会うことができて感謝の思いです。ありがとうございました。

ひとり親家庭 学生が支援

学園大と熊本市が連携「訪問事業」

実践的に学ぶ貴重な場

熊本学園大の学生たちが、母子・父子家庭を訪れ、子どもと一緒に過ごす同大と熊本市の「ひとり親家庭児童訪問援助事業」。本年度の活動を総括する「フォローアップ研修会」が2月下旬、同市であった。社会福祉学部を中心に、幼児教育や福祉分野への就職を望む学生にとって、対人援助を実践的に学ぶ貴重な機会になっている。（[illegible]）

ひとり親家庭児童訪問援助事業のフォローアップ研修会で意見交換する熊本学園大の学生たち＝熊本市の同大

ひとり親家庭児童訪問援助事業で参加者を代表して事例発表する熊本学園大社会福祉学部4年の原田康世さん

本学のひとり親家庭児童訪問援助事業についての記事が紹介されました。
熊本日日新聞（2013 年 3 月 4 日）

5. ひとり親家庭児童訪問援助事業の意義

竹原　美佐子（熊本市母子・父子福祉センター　元館長）

ひとり親家庭の子どもへ対する熊本学園大学の取り組みは、何よりも行政と連携し、大学側が積極的に関わり、福祉を志す若い方々が地域での支援の中核になるところにその意義があります。

訪問先の子ども達にとって、若くエネルギーに満ちた学生さんは、ほんの少し手を伸ばせば届く距離にある人生の先輩です。

子ども達は、学生さんを通して、単に勉強を見てもらったり、遊んでもらうだけではなく、家族とはまた違った世界と関わる機会を与えられたことで、楽しさや喜びと共に大きく成長する機会も与えられたということが言えるのではないでしょうか。

そして、それこそが「子どもを地域で育てる」ということに他ならないと思います。

更に、この事業は、子どもへの支援にとどまらず、間接的に、ひとり親家庭の親に対しての支援にもなっていること、特に「ひとり親家庭を孤立させない」点に於いて、大きな意義があります。

親と子どもの間に他者が関わるのはデリケートな部分も多く、なかなか難しいものですが、しっかりとした枠組みを作り、学生さんが誠実に関わることができていたことが、訪問援助事業の成果を出せたひとつの鍵なのでしょう。

この事業が終了したことは惜しまれますが、必要なひとに必要な支援を届けるために、形を変えて有益な支援体制ができますよう願っております。

6. 訪問援助員活動を経験して

古家　圭さん

子ども家庭福祉学科３期生　2011年度卒

私がひとり親支援事業を行ったのは大学３年の夏、父子家庭のため父親へ色々と相談するのが難しい年頃になってくるので話を聞いてあげてほしいと言う父親の思いから小学３年生の女の子と関わることになりました。当時はプールや児童館など外で遊ぶことが多く、まだ悩みもないようだったので毎回時間いっぱい遊ぶだけでした。そのため、支援事業が終わる頃これでいいのか、私たちがやっていることは何の役に立っているのか分かりませんでした。その後、女の子の希望もあり文通をすることになり小学６年生まで続きましたが、私自身仕事が忙しかったことや彼女が中学生に上がったことでだんだん疎遠になってしまいました。現在高校１年生になっている彼女、理由は分かりませんが父親と一緒には暮らしていません。私はそれを知った時、現在児童養護施設で働いている身としてもっと早い段階で何かしてあげられることはなかったのか、話を聞いてあげられることは出来なかったのか…と悔しく思いました。その当時も自分の役目が分からず、その後も何の力にもなってあげられなかったと悔いの残る経験になってしまいました。しかし、これらの経験をもとに現在は日々後悔することがないよう自分の仕事に責任を持ち子どもたちと関わるようにしています。

池下　詩子さん

子ども家庭福祉学科６期生

2014年度卒

私は、大学４年生のときに、小学５年生の女の子とお母さんのいるご家庭に訪問をしました。

初めての訪問で、すぐに「お姉ちゃん、折り紙しない？」と、話してくれ、折り紙をしたり、絵を描いたりして打ち解けていきました。また、近くの公園に行き、バレーやサッカーをして体を動かすこともありました。

月に２回ほどの訪問を続けていくうちに、お母さんは女の子が思春期の悩みや思いを、歳の近い誰かに伝える時間を求めているのだな、と感じました。女の子は、体を動かすのに少し不自由さを持っていました。私に話すのには、勇気がいったのかもしれませんが、折り紙で遊んでいるときに、何気なく笑顔で話してくれました。女の子やお母さんにとって、その不自由さは生活の中の一部だったと思います。このことをお母さんが私に言うのではなく、女の子が私に直接話してくれたことは、お母さんが女の子のことを配慮してのことだと感じています。お母さんは自分では言わず、女の子のタイミングで私にそのことを話すのを待っていたのではないかと思います。お母さんが私に直接言ってしまえば、これから女の子が自立していくきっかけをなくしてしまうのではないか、自分のことを相手に伝える良いきっかけとして、私がいたのではないかと感じました。私はこのことから、思春期にさしかかる子どもの成長をどのような距離感でどのように見守るかということの難しさを学びました。

ひとり親訪問支援を通して、私が悩みやちょっとした思いを話せる相手として訪問することが、お母さんの少しの息抜きの時間になったり、女の子が気持ちを外に出したりする大切な時間だったのではないかと思います。また、私にとって思春期の子と関わる機会はあまりなかったので、子どもたちのことを知る貴重な経験となりました。

平野　愛実さん

子ども家庭福祉学科７期生

2015年度卒

私は、大学２年生の 12 月から半年間、熊本市ひとり親家庭児童訪問援助員として、ひとり親家庭支援を行いました。母親と４兄弟 (うち小学生３人) の家庭に学生３人で訪問し、私は、当時小学２年生の男の子を担当しました。主な活動は、児童館や近くの公園での外遊びでした。中でも、一緒に自転車に乗る練習をしたことや、最終日、乗れるようになった自転車で動植物園に出かけたことは一番の思い出です。

この支援事業を通して、子どもたちと行動を共にし、家庭内での親子関係や子どもの様子を知ることができました。この経験は、現在保育士として働く上で、子どもや親の困り感にいち早く気付いたり、寄り添って一緒に解決策を考えたりと、子育て支援の分野で大いに役立っています。

また、訪問当初に比べ、徐々に姉二人の意見を柔軟に受け入れることができるようになるなど、半年間の活動の中で子どもの変化も見られ、私たち学生が〝近所のお姉さん〟として遊びに加わることの意味を感じました。さらに、ひとり親の場合、兄弟が多いとなかなか外に連れ出すことができないため、学生が付き添うことで外遊びの機会が増えたことは、この支援事業において大きな意味があったと思います。

これから、子育て家庭の形は、時代の変化によってさらに変化していくと考えられます。そのため、ひとり親家庭に限らず、全ての家庭に寄り添い、それぞれのニーズに合わせた支援が必要だと感じました。

亀山　結加さん
子ども家庭福祉学科８期生　2016年度卒

このひとり親家庭訪問援助事業での活動を通して、私自身とても貴重な経験をさせていただきました。私が担当させていただいたのは、小学生の女の子で、お母さんと２人暮らしです。女の子は、ＬＤ（学習障害）があると聞いていました。最初は不安ばかりで、正直、「私が訪問していて女の子のためになっているのだろうか」と思うことが何度かありました。しかし、女の子が縄跳びや自転車など、最初から諦めてそれまで出来なかったことを「どうやったらできるの？」「もう少しやろうよ！」と出来るようになったり、１時間半もかかったのですが一緒にカレーを作ったりすることを通じて、休みがちだった小学校での悩みや不安など聞くことができました。“何かを一緒に作る”という活動を通して、女の子の普段見ることのできない姿や日頃あまり話さないような内容を話すきっかけをつくることができたのではないかと感じました。私がしていることは、女の子にとってマイナスではなかったのかな」と今では感じています。また、お母さんからは、「女の子の笑顔が以前より増えました」「私の話も聞いてくれてありがとうね」という言葉もいただけて、「援助員になってよかった」と私自身とても嬉しく思いました。援助員として活動できたことに心から感謝しています。ありがとうございました。

野口　敦哉さん
子ども家庭福祉学科８期生
2016年度卒

子ども家庭福祉学科創設10周年おめでとうございます。

私は、子ども家庭福祉学科２年の時に小学３年生の男の子がいるお宅に訪問援助員として訪問しました。とても活発で体を動かしたり、生き物と触れ合うことが好きな男の子でした。

家族構成は、母親、祖父母、小学生の姉の５人家族であり、祖父母の協力もあり母親は仕事や家事が忙しいという印象は持ちませんでした。しかし、活発な男の子の相手をすることに対して体力的な面で苦労しているようで、男の子も母親や祖父母が遊び相手では満足していない様子でした。

訪問時の活動は、男の子の遊び相手が中心でした。しかし、大学で学んだ乳幼児と小学生では当たり前かもしれないが全く接し方が違い、慣れるまでに苦労しました。私が接し方に戸惑っていることに男の子も気付いていたのか、なかなか心をひらいてくれずに苦労もしましたが、お互いに呼びやすいニックネームを考え、呼び合うことで距離を縮めていきました。

距離が縮まると私に対する訪問時のニーズも変化していきました。保護者からは勉強を見てほしい、男の子からは体を動かして遊びたいとニーズが違いどちらを優先すべきなのか難しく、また短い訪問回数、時間で対応することが大変でした。

大学の実習は、未就学の子どもとの実習だったので、小学生との関わりは就学前にとどまっていた知識や興味を広げる良い機会となり私にとって刺激となりました。また、短い時間でニーズに応じる難しさを経験したことは良い経験となりました。

船辺　湧さん
子ども家庭福祉学科９期生
2017年度卒

私がこのひとり親家庭児童訪問援助事業を知ったきっかけとなったのは子ども家庭福祉学科の先生から話を聞いたことです。それまでは全くこのような事業があることは全く知りませんでしたが、自分にとって非常に良い経験になると思い登録しました。実際に依頼が来たとき、正直まだこの事業のことをはっきり理解していなかったので「大丈夫だろうか」という思いが強かったですが、それ以上に興味の方が強く引き受けることにしました。

初回訪問では互いに緊張もあってかあまり会話が弾まずにいましたが、親や友達にも話しづらいことでも訪問支援員という自分のような立場の存在がいることでなにか打ち明けることができ、少しでも気が楽になってくれることが自分の役目でもあるように感じました。それからの訪問では学校や塾の課題を見たりテスト勉強をいっしょにしたり、はたまたカードゲームをしたりと、回を重ねるごとに様々な部分が見えてきて自分の役目を少しずつ実感していくことができました。

このひとり親家庭児童訪問援助事業の活動を通して、自分がどれだけ相手の子に変化を与えられたかは分かりませんが、自分にとっていい経験となったことは確かであります。活動のすべてがいい思い出であり、いい出会いであったと今は思います。この事業を必要としている人も多くいるようなので訪問支援員に登録することが増えていってほしいと思います。

2017 年度　子ども家庭福祉学科教員一覧

教授 伊東 浩一
【専門分野】美術
【担当科目】造形

教授 伊藤 良高
【専門分野】保育学、教育学
【担当科目】教育学概論

特任講師 大津山 姿子
【専門分野】音楽リズム、音楽表現
【担当科目】音楽

特任助教 岡村 ゆかり
【専門分野】相談援助専門職論
【担当科目】ソーシャルワーク実習指導

准教授 栗原 武志
【専門分野】体育学
【担当科目】保育内容研究A（こころと健康）

教授 田中 均
【専門分野】美術
【担当科目】造形

特任准教授 続 修二
【専門分野】小児保健
【担当科目】こども保健

准教授 出川 聖尚子
【専門分野】児童福祉
【担当科目】児童家庭福祉論

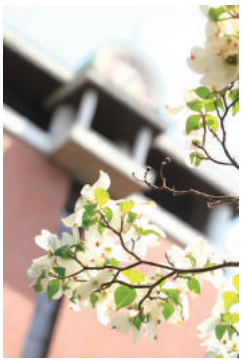
教授 宮里 六郎
【専門分野】保育学（保育実践研究）
【担当科目】保育内容論

教授 山崎 史郎
【専門分野】発達心理学
【担当科目】発達心理学

准教授 山西 裕美
【専門分野】家族社会学
【担当科目】家族社会学

准教授 吉津 晶子
【専門分野】音楽教育楽、世代間交流
【担当科目】音楽

表紙・げんきっずフェスティバルポスター作製：子ども家庭福祉学科３年　宮本真帆さん



熊本学園大学／社会福祉学部

KUMAMOTO GAKUEN UNIVERSITY　Social Welfare Faculty

子ども家庭福祉学科　2018年3月

〒862-8680 熊本市中央区大江2丁目5番1号
TEL：096-364-5161（代表）FAX：096-363-1289（代表）
http://www.kumagaku.ac.jp/